

清代ハーキム・ベクとムスリム社会との関係に関する一考察

—アフマド・ワン・ベクを中心として—

河野 敦史

清朝は1759（乾隆24）年に、現在の新疆ウイグル自治区の南部にあたる回部（「回疆」とも呼ばれる）を征服した。清朝は、主にテュルク系ムスリムが居住する当該地域を治めるに当たって、現地のテュルク系ムスリムの有力者を官人として任用するベク（伯克）制を敷いて間接統治を行った。各都市に駐在する清朝官僚の監督を受けながら、現地の有力者は三品～七品のベク職を与えられて、任地の行政に当たった。このようなベク制における最高の地位が、オアシス都市の行政長官たるハーキム・ベク（阿奇木伯克）であった。ハーキム・ベクは、勤務地の行政を担うなかで現地ムスリム社会に大きな影響力を持ち、往々にして職権を乱用し住民を圧迫したと考えられている。このような権力を乱用する圧政者としてのベクの姿は、先行研究によって指摘されており、特に大都市のハーキム・ベクを歴任したアフマド・ワン・ベク（以下、アフマドと略す）がそのようなベクの代表とされてきた。

そこで、本報告においては、先行研究がアフマドを圧政者の代表と見なしてきた論拠の一つである、アフマドが北京へ行くための旅費を現地のムスリム住民に分担させたという疑惑をヤルカンド参贊大臣の徳齡らによってかけられた事件に焦点を当てて分析した。本報告で使用した主な史料は漢文史料であり、『清実録』（とくに『文宗実録』）、イリ將軍の奕山に真相の調査を求めたアフマド自身の二度にわたる訴状（軍機処檔摺 085008・085413号）、また当該事件の調査に当たったイリ参贊大臣の布彦泰の上奏文（宮中檔奏摺 406003031号）を利用した。

本事件の概要は以下のようなものであった。1852（咸豊2）年に、ヤルカンドのハーキム・ベクであるアフマドが北京に赴こうとしたところ、ヤルカンドの参贊大臣である徳齡と幫辦大臣である倭仁がアフマドを呼び出し、アフマドが北京に行くための旅費をムスリムに分担させたという疑惑をかけた。アフマドがこの容疑を否認すると、徳齡らは、アフマドの家人やベクを呼び出して拷問を加えたいうえで供述を迫り、さらに回城（ムスリム都市）や回荘（ムスリム農村）に住むムスリムたちにもアフマドを告発するように求めた。これに対して、アフマドはイリへ使者を派遣して、イリ將軍奕山とイリ参贊大臣の布彦泰に調査を求める訴え

を二度にわたって行った。布彦泰は事態の真相についての調査を行った結果、アフマドは配下への監督不行き届きのためにハーキム・ベク職からの罷免、徳齡と倭仁は拙速な取り調べと弾劾を行ったために「降三級調用〔官を三級降ろして、他に転任させる〕」となった。

先行研究においては、当該事件に関する『文宗実録』の咸豊2年7月戊午の条に載る徳齡と倭仁によるアフマドに対する弾劾上奏、咸豊3年正月丙辰の条に載る布彦泰によるアフマドへの処分に関する上奏の記述が注目され、アフマドが北京へ行くための旅費をムスリム住民に分担させるという搾取を行っていたと結論付けられていた。しかし、本報告において『文宗実録』の記述を再検討した結果、当該の記述から必ずしも先行研究で主張されている結論が導き出され得ないことが判明した。

そのため、当該事件に関する詳細な調査報告である布彦泰の上奏文（宮中檔奏摺406003031号）を用いて、本事件を詳しく分析したところ、以下の点が明らかとなった。

- (1) アフマドは旅費をムスリム住民に分担させたという容疑は否定していたが、密かにムスリム住民への搾取を行っていた配下への監督不行き届きの責任を認めていた。
- (2) 徳齡と倭仁の命令を受けて、ベクたちが行った調査では、アフマドがムスリム住民に旅費を分担させたという事はない、と結論付けられていた。
- (3) 布彦泰が調査を行ったところ、アフマドを訴えたとされるムスリム住民は、アフマドへの告発を行ったこと自体を否定。当該のムスリム住民が提出した訴状を、大臣の意向を汲んだベクが、アフマドを訴える内容へと書き直したことが判明した。
- (4) 大臣がアフマドへ疑惑に向けた根拠は、大臣の聞いた噂に過ぎなかった。
- (5) 布彦泰は、アフマドの罪は配下への監督不行き届きにあり、イリへ使者を派遣して大臣を訴えた件については、情状酌量の余地を認めつつも、下位のものが上位のものを訴える気風が広がることは許されないとして、アフマドへの処分を提案していた。

以上のことから、アフマドが北京へ行くための旅費をムスリムに分担させたということはなく、彼の罪はあくまで配下への監督不行き届きにあったと考えられることを示した。

このような分析をふまえて、アフマドとムスリム社会の関係として、先行研究において想定されている、領主的な権力を振るうハーキム・ベクとその搾取に苦しむムスリム社会というような関係のみに集約され得ないであろうことを指摘した。

本報告においては、題目に示したような「清代ハーキム・ベクとムスリム社会との関係」に深く分析を加えることができなかった。さらに事例研究を進めて、「清代ハーキム・ベクとムスリム社会との関係」について立ち入った考察を行うことを、今後の課題としたい。

(中央大学大学院文学研究科博士後期課程)